

## 連載を終えるにあたって

本講義シリーズの15編の小文は、2010年7月より2014年1月にわたって日本心電学会誌『心電図』に掲載された。貴重な紙面を長期にわたり提供していただいたことに対し、編集委員の皆様および日本心電学会の会員の皆様に、心よりお礼を申し上げたい。

本講義では、ニュートン、ガウス、マックスウェルらによって創案された電気物理学的な理論である立体角理論によって、心筋梗塞に伴う異常心電図波形が説明できることを示した。臨床医や研究者が心電図を解析する際に、立体角理論が広く用いられるとともに、未解決の重要な心電図学的課題が実験的に解明されることを筆者は切望している。

さらに、各々の心電図には患者の病態についての情報のみならず、予後を予測させる情報が豊富に含まれていることも示した。また、心電図の基準値の多くは(特にQT間隔、QRS波の幅と振幅、PR間隔、心拍数)、人種によって影響される可能性が大きいことについても触れた。例えば、QT間隔は日本人を含めた東洋人では白人よりも約10~20ms長いというデータが発表されている。現在、日本では白人から得られたQT間隔の基準値が使用されているが、その場合、QT延長と診断される頻度が白人における頻度よりも著しく高くなると想定される。したがって、近い将来、日本を含めた多国間の大規模国際調査を施行し、人種間による心電図の基準値の相違を明らかにするべきだろう。日本人の患者には日本人から得られた基準値が使用されるべきであり、そうすることでより正確な診断と予後予測が可能になり、日本人の心疾患の治療成績の向上につながると、筆者は強く確信している。

なお、日本文の論文執筆に不慣れになってしまった筆者によって起稿された本講義シリーズの小文は、いずれも編集委員長の見玉逸雄先生が膨大な時間を費やし、正確で読みやすい日本文に書き直された。さらに、副編集委員長の加藤貴雄先生が隅々まで目を通し、適切な助言をしてくださった。両先生には感謝の言葉もない。また、私の手書きによる図は、編集室の皆様により正確かつ見やすい図に描き直された。心よりお礼申し上げます。最後に、皆様に長い間本講義をご愛読いただくことにつき、感謝の意を表す。

秋山俊雄